

住宅街の一角に、ぽつんと佇む小さなマッサージサロン。

駅から少し離れたその店は、近所の奥さまたちの間でひそかに話題になっているらしい。

アロマオイルを使った施術が評判で、日々の疲れを癒すのにぴったりなのとか。

地域に根付いたサロンを目指しているらしく、あえて駅から遠いこの静かな場所に店を構えているのだという。

だから利用客のほとんどは近所の主婦たちで。口コミだけで新規の予約が埋まってしまうらしい。

実際、わたしもこの店の常連である友人から勧められて、ようやく予約を取ることができた。

彼女は大学時代から同級生で、結婚を機にこの街へ引っ越し、今は仕事と育児に追われる毎日を送っている。

以前会った時は、疲れ切って顔色も冴えなかったけれど――久しぶりに再会した彼女は、見違えるほど肌ツヤが良く、本来の眩しい笑顔を取り戻していた。

何か良いことでもあったのだろうか。

理由を尋ねたときに、教えてくれたのがこのサロンだった。

「ここのサロン、本当にオススメなの！ 受ける前と後じゃ、全然違うんだから。わたしもママ友に教えてもらったんだけど、もっと早く知りたかったって思ったくらい」

「そうなんだ。でも……結構いいお値段じゃない？ 1回の施術でこの値段は、ちょっと勇気がいるかも……」

「大丈夫よ、それは特別コースの料金だから。ほら、このあたりってお金持ちの家が多いでしょう？ そういふところの奥さまが契約してるプランみたい。わたしが受けてるのは普通のアロママッサージだから、他の店とそんなに変わらないわよ」

「そっか……それなら、いいかも」

「でしょ？ はいこれ、紹介チケット。これを使えばもっとお得に受けられるから、一度試してみて」

そう言って渡されたチケットを手に、わたしはサロンのインターホンを押した。

完全予約制のサロンで、インターホンを押すとスタッフが出迎えてくれるシステムらしい。

ピンポンと澄んだ音が響いて少し待つと、静かにドアが開いた。現れたのは、きっちりと髪をまとめた若い女性セラピスト。

「あの、11時から予約をしていた者ですが……」

「お待ちしておりました。どうぞ、中へ」

予約表を確認すると、彼女は案内を始める。

淡々としながらも、どこか冷ややかな対応。

私はその後につき、優雅なロビーを抜けてカウンセリングルームへと通された。

静かな空間にはオルゴールの音色が流れ、棚には手書きのポップとともに、ガラス瓶に入ったアロマオイルが並んでいる。

勧められるままにソファに腰かけ、カウンセリングシートに筆を走らせていると、奥から女性セラピストが温かいカップを運んできた。

「こちらをどうぞ」

「ありがとうございます。えっと、これは……？」

「デトックス効果の期待できるハーブティーでございます。少し独特な苦みがございますが、お体によく効きますよ」

言われるがまま一口含んでみる。

口の中に広がるのは、ツンとした薬草のような苦み。だけど飲めないほどではない。

美意識の高い女性たちは、日頃からこんなものを口にしているのだろうか。

わたしがカップを開けたのを見届けると、彼女は淡々と話を進めた。

「本日はご紹介のプランですので、40分のアロママッサージコースでお間違いないでしょうか」

「はい、よろしくお願いします。あの……施術は女性の方が担当してくださるのでしょうか？」

「ええ。当サロンには男女のセラピストが在籍しておりますが、本日はわたしが担当させていただきます。……何か、気になることでも？」

「あ、いえ！ 何でもないです……すみません」

「承知いたしました。では、お部屋へご案内いたします」

さらさらとシートに記入を済ませた彼女に促され、通されたのは小さな施術室だった。

中央には清潔なベッドがひとつ。その上には、着替え用の下着が用意されている。

……けれど、それはあまりにも布面積の少ない、攻めすぎた下着だった。

かろうじて大事な部分を覆うだけの、細い紐と小さな布切れ。

あまりの攻めすぎたデザインに、わたしは思わず声を詰まらせる。

「では、準備をして参りますので、こちらにお着替えください」

「えっ……あの、これですか……？ 自分の下着のままではダメでしょうか……」

「申し訳ございません。アロマオイルでお召し物を汚してしまう恐れがございますので、皆さまにこちらの専用ランジェリーへお着替えいただいております」

それだけを素っ気なく告げると、彼女は部屋を出て行ってしまった。

一人残された部屋で、意を決して服を脱ぐ。

身につけてみると、予想以上に心許ない。まるで紐で肌を縛られているようで、いっそ何も身につけていない方が恥ずかしくないのでは

ないかと思えるほどだ。

「うう……恥ずかしすぎる……。オイルマッサージって、どこもこんな恰好させるの……？」

泣きたくなりながら、ベッドの端に腰を下ろす。

いくら友人の勧めとはいえ、来なければよかったと早くも後悔が押し寄せてきた。

日頃の疲れをほぐしたくて足を運んだのに、余計な緊張で身体がこわばっていくのを感じる。

（施術が終わったら、お礼だけ言ってすぐに帰ろう……）

そんなことを考えているとドアが開き、準備を整えた女性セラピストが戻ってきた。

トレーの上には、アロマオイルの入った深緑色の遮光瓶が置いてある。

「お待たせいたしました。それでは、ベッドに仰向けになっていただけますか」

促されるままゆっくりと横たわると、彼女は自分の手のひらにたっぷりとオイルを垂らした。

体温で温められたアロマの香りがふわりと立ち上る。

甘く深く、どこかエキゾチックな、心が落ち着く香り。

深く息を吸い込むと、胸の奥まで甘い香りで満たされていく。

「……すごく、いい香り。わたし、この香り好きです……」

「気に入っていただけて光栄です。疲れと睡眠不足にお悩みとのことでしたので、心をほぐすアロマをブレンドいたしました」

彼女の手が、そっと私の鎖骨のあたりに置かれる。

ぬくもりを帯びた滑らかな手が、スーッと外側に向かって肌を滑っていく。

緊張でこわばっていた胸元がゆっくりと開かれ、深い息が漏れた。

オイルをまとった指先が優しく肌を撫でるたび、うっとりとするような心地よさに包まれる。

さっきまでの恥ずかしさも吹き飛び、ウトウトとまどろみの中へ引き込まれていく。

（最初は怖かったけれど……マッサージって、こんなに気持ちいいんだ。やっぱりプロの手ってすごい……）

うっとり夢心地に浸っていた、その時だった。

隣の部屋から、壁を通り抜けて艶っぽい声が響き渡った。

『あゝあゝっ……すご、いい……ッ♡ もっと……ッ、もゝっゝとゝおゝ……ッ♡♡』

かりかり……ぐにい……♡

『お`ほ`お`お`っ♡そこ……ッ、弱いとこ責められるの、好きい`
……ッ♡♡』

ぐにぐに、こりこり……♡

『も、むりい`……ッ♡ばかになっちゃう`……う`♡♡』

こりこりこりこり……ッ！ぐちゅうううう……ッ♡♡♡

『い`ぎ`ゆ`う`う`う`っ！`♡`♡`お`っ`♡`ほ`お`お`お`お`♡`
♡`♡`』

——健全なマッサージ店で聞こえるはずのない、えっちな悲鳴。
えっちな甘い声と、ねっとりと湿った水音が、わたしの耳を汚してい
く。

（な、なに……！？あの声……！隣で、一体何が起きているの……
っ！？）

あまりの衝撃に、わたしは思わず息を呑んだ。

「……あ、あの……あの声は……？」

「……ああ、お隣も施術中でございます。あちらは特別コースをご利

用のお客さまですね」

「特別、コース……？」

「ええ。当サロンでは、ご希望のお客さまだけに特別な施術をご案内しております。そちらは 120 分のコースで、相応のお値段を頂戴しておりますが……」

参考にどうぞ、と渡された料金表。そこに印字されていた数字は、驚くほど高額だった。

「お隣のお客さまもすっかり特別コースの虜になられて、何度も足を運んでいただいております。……相当、気持ちいいですよ。わたし自身は、受けたことはございませんが」

「そう、なんですか……」

動揺するわたしを置き去りにして、隣室からはさらに激しい音が聞こえ始める。

『ま、待って……ッ！ イッたばかりなのに……ッ♡ あと 20 分もあるなんて……っ♡♡ むり、い……っ！ これ以上されたら壊れちゃう……ッ♡♡』

ぬちゅ……♡ ぐぷう……ッ♡♡

『お`お`っ♡ すごお……っ♡♡ ぶっといおちんぽがおまんこに入って……ッ♡ 夫のものより、全然イイのおお……ッ♡♡』

どちゅッ♡ どちゅッ♡ どちゅッ♡ どちゅッ♡

生々しく響く、肌と肌が激しくぶつかり合う音。

大人であるわたしには、それがどんな不潔でハレンチな行為か、嫌でも分かってしまう。

愛する人と確かめ合うべき行為を、こんな場所で、まるで盛りのついた獣のように貪り合っているなんて……。

不潔で、最低で……今すぐ耳を塞いで逃げ出したいはずなのに――。

「……っ、ふ……あ……っ」

どうしてだろう。

わたしの息は荒くなり、おなかの奥がきゅん♡と疼くように熱を帯び始めていた。

その熱はとろりと甘い蜜となって溢れ出し、下着のクロッチ部分をじゅくじゅく♡と濡らしていく。

(嫌っ……嘘でしょう？ こんな……用意してもらった下着なのに……っ♡)

「……気になりますか？ 特別コース」

「……え……？」

無意識のうちに、太ももをこすり合わせていたのを見られたのか。
上から降ってきたのは、冷ややかな女性セラピストの声だった。
欲望に身を焦がす客を何人も見てきたような、見下すような冷たい
眼差し。

隣のえっちな声に毒され、すっかり欲情してしまった醜い姿を見透
かされている――。

「あ……っ、は、はい……っ」

「さようでございますか。ご希望でしたら、ここから 120 分の特別
コースへご案内も可能ですが……いかがなさいますか？」

ベッドの上に横たわるわたしと、それを見下ろす女性セラピスト。
大事な部分を隠す小さな布地は、溢れ出た愛液でぐっちょりと濡れ、
ぷっくりと膨らんだおまんこを浮き彫りにしていた。

わたしが断らないと確信しているのだろう。
発情したメス豚を蔑むような、冷めきった瞳。

けれど――今のわたしには、そんな羞恥心すらどうでもよかった。
頭の中を支配しているのは、身体の奥の熱と疼きを今すぐ解き放ち
たいという欲望だけ。

「……おねがい、します……っ♡」

震える声でそう告げると、彼女はそっと手を下ろした。

「かしこまりました。それでは特別コースはわたしではなく、男性セラピストによる施術となりますので、引継ぎを行って参ります。少々お時間をいただきますが……このままお待ちくださいませ」

そう言い残して、彼女は静かに部屋を出て行った。